

からだとは・病とは(25) 子宮筋腫・^{せいがん}卵巣腫瘍 鈴木斉観 (齊観堂鍼灸治療院院長)

3月3日の中日新聞の記事(「不調を感じたら産婦人科へ」)にこうあった。

「昨年春から、インフルエンザ、帯状疱疹、扁桃炎…と、毎月のように病気になり「これは変だぞ」と思った記者(38)。秋に…婦人科の超音波検査で卵巣腫瘍が見つかった。手術で良性と判明し胸をなで下ろしたが、病気になりやすかったのもこのためだったのだろうか。…」

病気になりやすかったのが卵巣腫瘍の為だと思った、この記者の思いは正しい。

東洋医学的に見れば、卵巣腫瘍があるということは、卵巣のある下腹に気血の滞りがあったということである。つまり氣と、血液をはじめとする体液の循環が悪くなっていたということである。しかも現在もその状態が続いているばかりか、滞りは大きくなっていると考えられる。

下腹に滞りがあれば、そこを通る経絡を流れる気の循環が悪くなる。気は経絡を通じて全身を巡っているのだから、その滞りの影響は全身に及ぶことになる。体内の臓器は気を受けて働くから、気の循環が悪ければ、臓器の機能も減退する。栄養状態が下がり、免疫力が低下する。そうすると外からはインフルエンザや風邪のウイルスに侵されやすくなり、内では沈静していた帯状疱疹ウイルスが活発化しやすい状態となる。おそらくこの記者の下腹は慢性的に滞った状態があり、下腹が張ったり、便通が悪かったり、冷え症であっただろう。

血液は流れが悪い状態が続くと、死に血となって滞る。血毒である。冷え症の女性の足の内くるぶし周辺を見ると、よく何本もの細い赤糸の様な血液の滞りのスジが見られる。この様なものが下腹内部にできるわけである。

正常な血液であるならば、免疫力があるわけだが、死に血である血毒では、反って菌などにとっては栄養となる。かくして血毒を核として形成されたのが卵巣腫瘍であり、子宮筋腫である。

「手術」とあるから、この記者は卵巣腫瘍を取り除いたようであるが、これで問題は解決したわけではない。血毒の一部が取り除かれた半面、手術の傷は新たな滞りを生む。しかも下腹の滞りはそのままである。1年後、2年後の体調はどうであろうか。

最近の若い女性はからだを動かさない上に冷飲食を当たり前の様になっている。ますます卵巣腫瘍や子宮筋腫、不妊症など増えていくだろう。

こうした女性の下腹には何本もの細いスジ張りができている。鍼灸ではそのスジ張りを緩め、下腹の循環を良くする。そして凝り固まった腫瘍をほぐす。そうすると、月経の時に、色の濃いドロっとしたものが出て来るようになる。血毒が排出されたわけである。もともと、こうした月経である場合は既にからが排出しようとしているわけであるが、更に排出を促す必要がある。これによって腫瘍は小さくなっていく。冷え症が改善され、不妊症が治る。

子宮は血海と言われる。そして月経は受胎の為に周期的に増殖する子宮内膜の剥離であるだけでなく、子宮周辺の血液をきれいにする機会でもある。更年期で月経が止まりかけていた人が鍼で復活することがよくある。早く止まって欲しいと考える人もいるが、順調な月経をできる限り続けて、血毒を排出し、「これからだ」と思える老後を迎えるのが肝要である。若い人の無月経となれば、尚更である。(2006年3月春分の頃)